

現代へいまを生きる主婦たちの頑張り記録

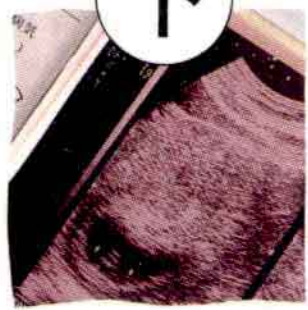
涙と 勇気が 出る 話

下

私の昨日・
今日・明日



命を見つめる



主婦の友
ミニブックス

本書のご感想をお聞かせいただけませんか？

①この本で役に立ったのはどんなことですか。

②今後このシリーズに、どんなテーマがほしいですか。この2つの質問にお答えいただいたかたの中から、抽選で50名様に文庫本サイズの布製ミニポーチをさしあげます。応募の際には、あなたの年齢と、できればご家族の構成もお知らせください。あて先 〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9 主婦の友社第3事業部主婦の友ミニブックス「涙と勇気が出る話（下）〈命を見つめる〉」係



主婦の友ミニブックス

現代〈いま〉を生きる主婦たちの頑張り記録

涙と勇気が出る話(下)〈命を見つめる〉

私の昨日・今日・明日

平成9年6月26日 第1刷発行

編者／株式会社主婦の友社

発行者／石川康彦

発行所／株式会社主婦の友社

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9

☎(編集) 03-5280-7531 (営業) 03-5280-7530

印刷所／凸版印刷株式会社

©SHUFUNOTOMOSHA CO.,LTD. 1997

Printed in Japan

ISBN4-07-221741-7

落丁本、乱丁本の場合はおとりかえします。

図本書の全部または一部を無断で複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複製を希望される場合は、日本複製権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。

¥680

本書は「私の昨日・今日・明日」（「主婦の友」誌に連載中）を文庫化したものです。

現代へいまを生きる主婦たちの頑張り記録

涙と 勇気が出る 話

(下) 命を見つめる

私の昨日・今日・明日

主婦の友ミニブックス

図書館
章

はじめに

「家族がみな健康に暮らせますように」主婦ならばあたりまえの、そして切実な願いです。しかし、そうした願いもむなしく、時として、病気や障害が幸福な家庭を襲うことがあります。そのときあなたは、そうした現実をどう受け入れ、どう立ち向かいますか。

この本は自分自身や夫、子どもの病気や障害に直面し、真正面から「命を見つめた」主婦の心と暮らしの記録です。

『主婦の友』編集部には毎日たくさんのお便りが寄せられます。その中には気軽に読み過ぎしてしまえない重い内容のものもあります。とくにご自身やご家族の病気、障害の問題を

かかえながら、日々、主婦として、妻として、母としての務めにいそしむ姿は、私たちに熱い感動を与えてくれます。

日々の暮らしについて、もっとじっくり話を聞かせてください……。そうしたかたがたの家庭におじゃまをして取材を重ね、『私の昨日・今日・明日』という連載ができました。取材の中で異口同音に語られた「つらい体験を通してからこそ見えてきた、私たちなりの家族の幸福」。生きていく勇氣とはまさにこうした思いなのではないでしょうか。

その後の様子を伺った再取材も加え、一冊の本にまとめました。10人の普通の主婦の涙の重さと勇氣の輝きが、読者のあなたにも届きますように。

主婦の友編集部

現代〈いま〉を生きる主婦たちの頑張り記録

涙と勇気が出る話(下)〈命を見つめる〉

——私の昨日・今日・明日——

目次

2 はじめに

第1章

私は、負けない

19歳で下半身不随に。
車椅子で恋をし、結婚し、母になった

●武井美樹さん (27歳・栃木県)

ガン治療か胎児の安全か。
医学界も揺るがした苦悩の日々

●小林真理子さん (31歳・神奈川県)



武井美樹さん



小林真理子さん

表紙デザイン／落合光恵
レイアウト／編集社
編集／主婦の友社、
オプトコミュニケーションズ



左合恵美子さん



吉田美枝さん



井口淳子さん

第2章

108

88

72

56

40

青春時代は花形ランナー。体力は自信があつたのに突然の大病

●井口淳子さん（27歳・和歌山県）

あと10年、息子が18歳になるまで、乳ガンなんかに負けられない

●山下さき子さん（38歳・岡山県）

妻だから思う夫の命の重み

夫が視覚障害者でも普通の夫婦。自然にそう言える、結婚11年目

●吉田美枝さん（36歳・千葉県）

失意の日々を越えて、夫の病気が夫婦のきずなを強くした

●山田喜久美さん（29歳・宮崎県）

父と夫をつづけて失った不幸を、強く生きるチャンスに変えたい

●左合恵美子さん（33歳・岐阜県）



山田喜久美さん



山下さき子さん

第3章

母として命はぐくむ



浅井みどりさん

128

試練だったわが子の大やけど。
いま普通の幸せをかみしめる

●浅井みどりさん（31歳・埼玉県）

144

12年ぶりの出産は、
私にほんとうの自分を気づかせてくれた

●山田まり子さん（35歳・新潟県）

160

将来を見すえ、
障害のある息子をたくましく育てたい

●大西映子さん（33歳・三重県）



大西映子さん



山田まり子さん

○本書に登場するかたがたの年齢・住所は「主婦の友」誌に掲載当時のものです。
また、近況を伺った再取材は、平成9年3月から4月にかけて行いました。

私は、負けない

第1章

車椅子で母になった女性。大手術にも、ガン宣告にも負けない女性。その圧倒されるほど力強い笑顔の背景には、頑張り屋だった子ども時代、行動派だった青春時代があり、また、どうしても守り抜きたい家族の存在がありました。

19歳で下半身不随に。車椅子で恋をし、結婚し、母になった

武井美樹さん(27歳・栃木県)

泣いたのは一度だけ。大好きなバイクに乗れなくなったから

武井美樹さんの1日は、朝、ご主人の孝次さんに抱きかかえられ、家族3人で寝るベッドから車椅子に移ることで始まります。

玄関にスロープをつけ、家じゅうの段差をなくし、廊下の幅を1m20cmとり、室内エレベーターを備えた4DKの2階建て。この家は、車椅子で自由に動き、家事ができるように美樹さん自身が

PROFILE

昭和44年、栃木県足利市生まれ。高校卒業後、機械設計の仕事につくが、半年後にバイク事故のため下半身不随となり、車椅子の生活に。2年の入院生活ののち、車シヨップで知り合った孝次さん(30歳・電機メーカー勤務)と、平成4年12月に結婚。平成6年10月に、長女・捺好^{なつみ}ちゃんを出産。足利市内で、家族3人暮らし。

足利市を流れる渡良瀬川の遊歩道。平日は
家から出にくい美樹さんのため、休日は孝
次さんが必ず車で外に連れ出す





20歳の成人式。入院中の病院から出席したが、下半身不随で一生車椅子であることはすでに告知されていた

結婚式は、両方の親と、2人の交際を応援してくれた友だちを集めて。「一度はウエディングを着たかった」と美樹さん

設計した家です。

高さ90cmと低めにあつらえたキッチンで、美樹さんは包丁も使えば、コンロで調理をし、流しで食器洗いもします。洗濯は、洗濯物が出し入れしやすいよう、ベランダの床を30cmほどの深さにくりぬいておいた洗濯機で。電話や電気のスイッチの高さも、すべて車椅子に乗って手が届く高さに設置されています。握力が弱く、腹筋がきかないので掃除機かけはできませんが、目についたゴミは、マジックハンドでつかんでゴミ箱に運びます。健常者の主婦が、家の中でする家事のほとんどすべてを、美樹さんは車椅子に乗ったままこなしているのです。

そして、美樹さんの1日は、夜、車椅子から孝次さんに抱かれてベッドに戻ることで終わります。

「おふろに入るとき、車に乗るとき…… 1日に何度も孝ちゃんにだっこしてもらえます。しかも、50歳になっても、60歳になっても抱いてもらえるんですよ。それはうれしいですよ。私、障害者になってよかった、と思える瞬間なんです」

19歳の交通事故で下半身不随になって8年。車椅子生活の中で、美樹さんは恋をし、結婚し、主婦になりました。いまは、1歳8カ月になる捺好ちゃんのお母さんです。

昭和63年11月1日朝。勤め先に向かうため、愛用の400ccのバイクで足利市内の交差点にさしかかった美樹さんは、対向車線から右折してきた乗用車にはねられ、バイクの下敷きになったまま50mも地面を引きずられました。救急車でかつぎ込まれた病院の医師の診断は、くびから上を除く全身にわたる多数骨折と内臓破裂。一命をとりとめたものの、意識をとり戻したときには、事故から1週間が過ぎていました。

「くびから下がしびれたまんまで、感覚がないんです。見舞いに来る父や友だちが明るくふるまってくれる分だけ、私の心のどこかで、『車椅子になるんじゃないかなあ』と思ってました」

それから7カ月の間、美樹さんはベッドに寝たきりでした。その長い時間が、もう二度と歩くことができない体になったことを美樹さんに悟らせました。

「きょうは大事な話がある」

ベッドサイドの医師からこう切り出されたとき、美樹さんは先回りして答えます。

「先生、つらいでしょう。歩けないのはわかってるから、言わなくてもいいよ。私、車椅子で頑張っているから」

損傷は、胸椎の4、5、6番の圧迫骨折による、わきから下の下半身不随。事故から7カ月、自分では障害者になることを受け入れていたつもりの美樹さんでしたが、動かぬ現実として告知されたショックはやはり大きなもの。医師が立ち去ったあとの病室で、見舞いの人の前ではけっして見せなかった涙を流しました。でも、障害者であることがつらくて泣いたのは、あとにも先にもこのときだけです。

「私が泣いたのは、歩けないことより、大好きなバイクに乗れなくなったこと。たったひとりでバイクに乗って、風を切っているときだけは、いやなこと何もかも吹っ切って、忘れることができたから」

美樹さんは、3歳のときに両親が離婚。母親はひとり娘の美樹さんをおいて家を出ていきました。その後、父親は二度の再婚と離婚を経験。新しい母親との間に子どもが生まれるたびに、腹違いの子として苦い思いもありました。小学校入学を機に引きとって育ててくれたおばあちゃんが中1で亡くなったとき、美樹さんは「もう自分しか頼る人間はいない。だれにも頼らず生きていこう」と心に決めたといっています。



捺好ちゃんが1歳になるまで、育児のすべてはこのベッドの上。「成長に合わせて、何度も改良をしました」と孝次さん。普通のベビーベッドより大きい



「小さいころから、事故以上に悲しいこと、つらいことがいっぱいあったから。障害者になったことくらい、自分ひとりで乗り越えればいいことだと思いました。そうだ、バイクに乗れないなら、自動車に乗ればいい、障害

ベランダを30cm深さにくりぬいて、洗濯機をおいているが、洗濯機の中の洗濯物はゴミばさみでつかんで出している

者用に手動の車があるはずだ、って。目標ができたなら、1日も早くリハビリに専念したいと、意欲がわいてきましたね」

事故から1年4カ月たった平成2年3月。車椅子にすわれるようになった美樹さんは、東京都武蔵村山市にある脊椎損傷専門のリハビリ病院に転院します。握力ゼロの手に力をつけることからのスタートでしたが、着がえ、食事、排泄、入浴といった日常生活の基本動作、車椅子の操作、そして手動操作の自動車運転免許取得までを、わずか7カ月でマスターしました。

「リハビリ病院の中で、私よりひどい障害の人が頑張っているのを見たら、負けてられない。もっと頑張らなくちゃって」

いまに比べれば、何から何まで自分ひとりでやろうとする「りっぱな障害者をやっていた」と美樹さんは当時をふり返ります。が、その肩に力の入った頑張りは、小さいころから他人に甘えることを知らずに育った心の裏返しでもあったのでしょう。

「さあ、いよいよ、」 「談のいもろび」 「私と結婚して」

平成2年10月。事故からほぼ2年の歳月が流れ、父親の待つ家に戻った美樹さんは、手動操作つきの自動車を購入。同じ店で、同じ車種の車を買ったのが縁で知り合ったのが、

ご主人の孝次さんでした。

「孝ちゃんは、いまよりやせていて、若いころの石原裕次郎に似て、いい男だったんですよ（笑）。出会ってすぐ、冗談のつもりで『私と結婚して』と言ったんです」

美樹さんは「直観としか言いようのない、一目ぼれだった」と言います。一方の孝次さんは、障害を得て日が浅いことを感じさせない明るさと率直さで、健常者の間に入って生き生きと趣味の車の話に興じる美樹さんの姿に、新鮮な驚きを感じました。

2人の交際は、車でデートするにも、美樹さんの体を抱き、ふれあうことからスタートし、「どうやって生活しているの?」と、孝次さんが、美樹さんの障害者としての暮らしぶりを一つ一つ聞き出す作業を積み重ねながら、進んでいきました。

「いったい何ができて、何ができないのか、全部紙に書き出せって言ったこともありました。それくらい、車椅子のことはわからなかったから」

「食事の量も水分量も、常に一定にしないと、排泄の勘が狂うこと。おしっこは、袋にためられるように管を入れて導尿していること。排便には2時間かかること。おふろはだれかに抱きかかえてもらわないと入れないこと。自分の体の管理だけで1日の半分以上を費やすこと……全部隠さず、一から説明しました」

ある日、美樹さんは、孝次さんにゴミ出しを頼みます。ひざの上にゴミ袋をのせ、家か